

# TAMABI NEWS

Tama Art University News Magazine

vol.86

## 2020年度受賞ラッシュ特集



卒業生2人がGUのスペシャルムービーを共作

三原 康裕 × 林 響太郎

企業の人事担当者・卒業生に聞く  
アクセント / サイバード

# 『アートアワードトーキョー 丸の内2020』



## 20年大学院油画修了の許寧さんがグランプリを受賞

### 全国の卒業修了制作展から新たな才能を発掘する若手アーティストの登竜門

全国の主要な美術大学・芸術大学・大学院18校の卒業修了制作展に出展された全作品の中から優秀作品を発掘し、東京・丸の内界隈の各会場に展示して審査を実施するもので、2007年から行われている。今年度は5,200点以上の作品の中から最終25作品にまで絞られた。次世代を担う作家たちの清々しい感性が評価される現代美術の展覧会。



線的な要素と色彩的な要素とをフォーマルな観点からエレガントに組み合わせた画面の美しさや、緻密かつ繊細な感覚で描かれていることなどが高い評価を受けた。



許寧  
20年大学院油画修了

### 多摩美で学んだすべてを凝縮させた作品

はじめて横幅3mを超える大作に挑んだこの作品は、在学中に学んだすべてを凝縮させた集大成の一作となりました。穂先の細い面相筆で極細の線や面を描き、ドリッピングという手法で絵の具のハネ、かすれ、盛り上がりといった偶然性を共存させながら「命の躍動感」を表現し、「巨大な四角い世界」と向き合いました。制作にあたり、私は下描きをほとんどしません。その時々感情の赴くま

ま、たとえ失敗をしても、消したり直したりすることはありません。一瞬の筆の中にこそ「真実」があり、そのすべてに価値があると考えているからです。この作品は多摩美の「自由と意力」という理念を体現したものであり、今回の受賞は先生方からのアドバイスや質の高い授業から得られた貴重な経験がもたらしたものだと考えています。学生の皆さんにも「自由と意力」を理念とする開かれた環境の中で自律心を育み、のびのびとチャレンジしてほしいと思います。



グランプリ受賞作品『Oil Painting in history--Freedom』 2月10日、小山登美夫ギャラリーにて撮影

# 受賞がもたらすものは何か、それをどう次につなげるか

## 2020年度 受賞ラッシュ特集

世界中がコロナ禍に陥った2020年は、創造的な活動の機会や発表の場が制限されるなど、不安な1年となりました。しかしその一方、学生や卒業生たちが、さまざまなジャンルで続々と受賞するといううれしいニュースもありました。この困難な状況で受けた評価を、どう次のステップにつなげていくのか。受賞者と教授らの声をお届けします。

## 『FACE 2021』 19年大学院油画修了の魏嘉さんがグランプリを受賞 学生・卒業生 総勢18名が受賞・入選



グランプリ受賞作品『sweet potato』  
余白の使い方と独自の色彩感覚が審査員に強い印象を与えた。

### 海外コレクターも注目する公募展 今年度は1,193名の新進作家が応募

今回で9回目の開催となるSOMPO美術財団主催の公募コンクール。「年齢・所属を問わず、真に力がある作品」を募集し、全国各地から幅広い年齢層の新進作家たちが応募する。今年度は1,193名の応募があり、時代の感覚を鋭く捉え、国際的に通用する可能性を秘めた83点が入選した。海外コレクターからの関心も年々高まっている。

### 自分の表現を探し、自信の持てる手法を確立したい

本作は、コロナ禍の影響で半年ほど故郷の台湾に滞在している間に訪ねた場所や食べたものをグラフィカルに配置した、滞在記録のような作品です。作品名の「sweet potato」はサツマイモの形に似ている台湾島を表しています。生まれ育った土地を再認識した絵画がどう評価されるのか不安でしたが、グランプリに選んでいただきとても励みになりました。自分の表現がまだ定まっていないので、自信の持てる手法を確立したい。今後は中国の山水画をモチーフにした制作をしたいと考えています。

魏嘉  
19年大学院油画修了



優秀賞受賞作品『records』  
町田帆実(19年大学院油画修了・油画副手)

今年度は魏さん、町田さんが受賞したほか、現役の学生や大学院生、卒業生ら16名が入選した。受賞および入選作品は2月13日から3月7日、SOMPO美術館で行われた「FACE展2021」で展示された。

先生から学生へ

「自由と意力」を礎に、美術を通して社会に夢や希望を与える

多摩美の油画には、数々のアワードで多くの受賞者を輩出してきた歴史があります。今回、コロナ禍の状況下においてもハイレベルな作品が多く出品され、たくさんの受賞作が生まれたことを誇りに思っています。本学の理念「自由と意力」が示す通り、自らの意志で課題や研究制作に取り組み、意欲的に挑戦した結果の表れでしょう。ファインアートの動向が変化する今、技術を超えたところにある世界観や色彩感覚、物語性といった多角的な力量が求められるようになりました。その中で世に出ていく作品には、社会に活力を与える力があると私は考えています。自分を信じ、喜びをもって創作を続けてください。芸術を志す皆さんには、どんな時代でも困難に立ち向かい、作品を通して人々に夢や希望を与えられる活動をしてもらいたいと期待します。



木嶋 正吾  
油画教授

# 『第30回吉田秀和賞』

06年芸術学科卒業の  
荒川徹さんが受賞

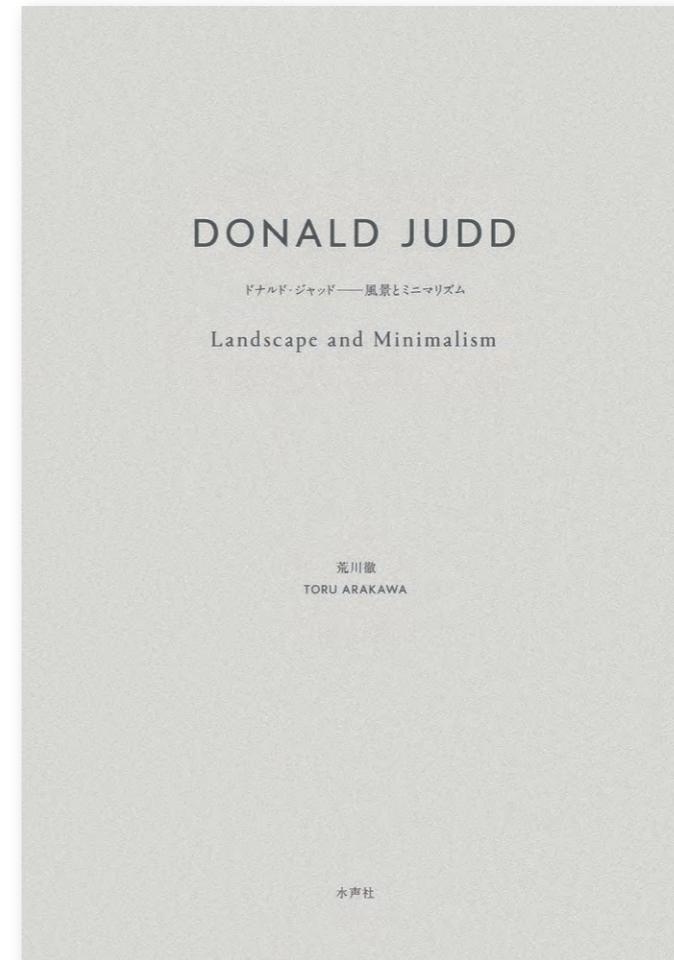


榎木野衣教授も受賞した、  
優れた芸術評論に贈呈される賞

音楽を中心とした芸術評論に多大な功績のあった吉田秀和(1913-2012)の名を冠し、1990年に創設された賞。音楽・演劇・美術などの分野で優れた芸術評論を発表した人に贈呈される。水戸市芸術振興財団が運営。過去には共通教育・榎木野衣教授も『後美術論』(2015年 美術出版社)で受賞している。今年度は候補書籍総数135点の中から、水戸芸術館設計者で建築家の磯崎新氏と評論家で慶應義塾大学法学部教授の片山杜秀氏による厳正な審査の結果、荒川さんの著書『ドナルド・ジャッド—風景とミニマリズム』が選ばれた。



本全体がミニマリズムに影響を受けたアートワークとして考えられており、本文も文字が小さく横書きであるなど、一般的な人文系の研究書とは一線を画した造本設計となっている。(装幀:宇平剛史)



受賞作品『ドナルド・ジャッド—風景とミニマリズム』(水声社)  
現代アートを代表する美術家、ドナルド・ジャッド(1928-94)の絵画やオブジェクト作品、建築から家具制作に至るキャリアを中心に、ミニマリズムの芸術がいかに人工的な風景や工学的構造などに触発されてきたかを深く追求した研究書。



荒川 徹  
06年芸術学科卒業

社会に過剰に適応したことをやらなくても良い

現代音楽への関心から芸術研究を志すようになった私にとって、今回の受賞は信じられないほどであり、たいへんうれしいことでした。作品の構成要素を極端に減らすミニマリズムは、そもそも既存の人工化された風景や建築に大きく影響されたのではないかと、いうことを長らく考えていました。ミニマリズムは美術にはあまりにも四角く、建築というよりもさらに、土木の構造体に似ています。自分でも土木の写真をあちこちで撮りながら、構成要素を減らしていくミニマリズムを、高速道路やビルなど、抽象化された風景や建築と結びつけて、工学的に分析したのがこの本です。ドナルド・ジャッドが空間や風景、生活を統合する自らの芸術を構築していったプロセスを、ミニマリズムの作品形態の急速な変貌とともに描き出しています。

私の本は研究書ですが、それ自体をミニマリズムに影響を受けた「アートワーク」として考えています。受賞するタイプのものではないと思っていましたが、この結果を受けて、社会に過剰に適応したことをやらなくても良いという意識を強めました。今後は自分の専門である芸術理論を確かに広めていきたいと考え、ここ10年ほどで書いた映像論・美術論を、新しく本としてまとめようと思っています。映像制作の実践的な方法論を、技術的なノウハウだけではなく、思考の方法として構築しなおしたことになる予定です。

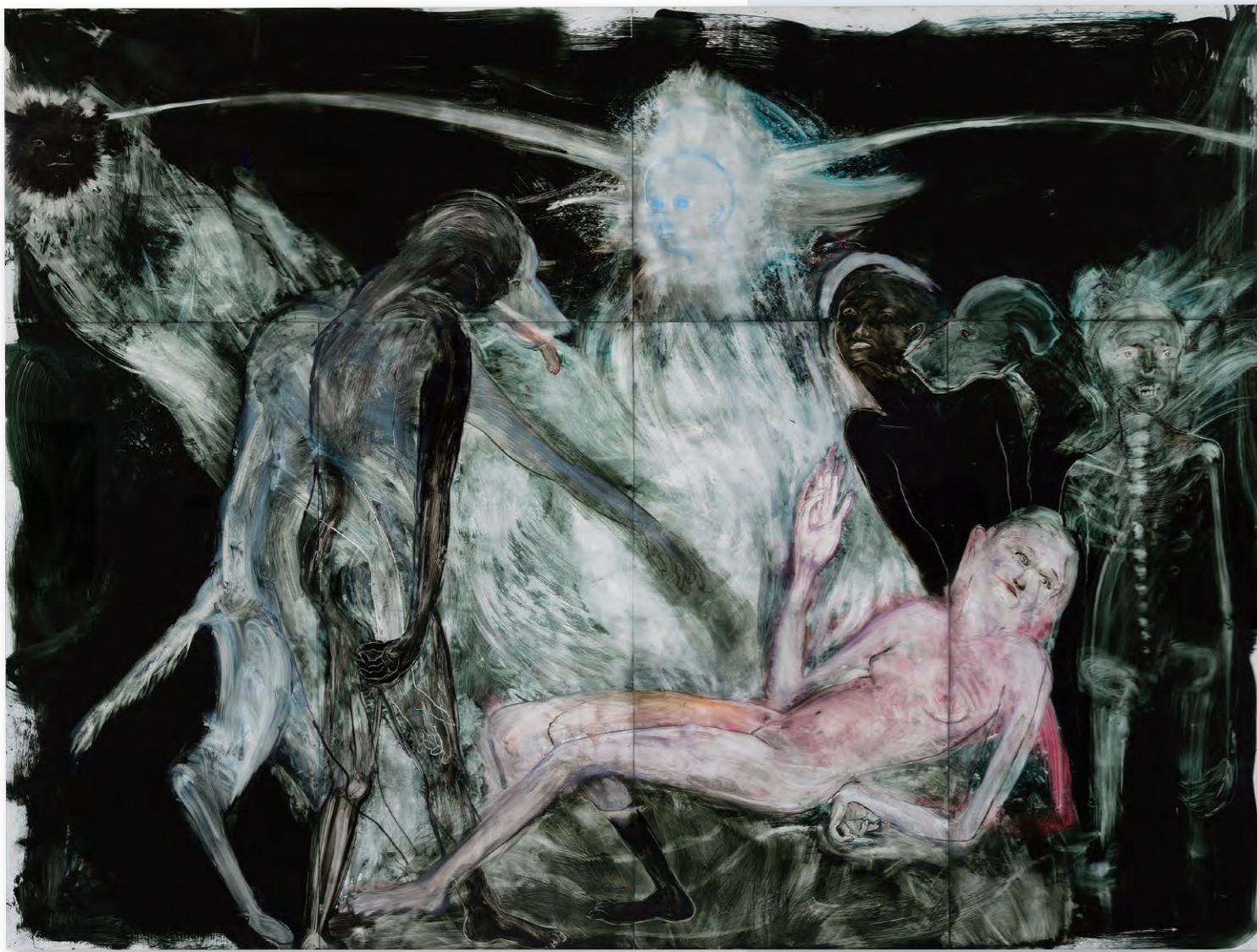
大学卒業から今回の受賞までは14年ほどかかっています。たとえ5年や10年で結果が出なくても、気にせず継続することが大事だと思っています。

第30回 吉田秀和賞【審査委員選評】より

ミニマリズムを具体的に論じながら  
「美術外」の思考と接続させた

磯崎 新氏(建築家)

荒川徹の『ドナルド・ジャッド—風景とミニマリズム』には、芸術論、評論として、論説に確かなシステムがあります。ミニマリズムに関する著作が多数あるなか、本書はミニマリズムに徹し、論点が展開していく上での標的(アーティスト、年代、場所)が具体的に絞られている点が非常に良いと思いました。かつミニマリズムを都市、建築、工業製品、人工的なランドスケープなど「美術外」の思考と接続させて論じており、展開のヴァリエーションが豊かで、文脈が開かれています。若手の論客として、近年の新しいメディアを含む現代的な視点によって書かれており、何より読ませるということが印象に残っています。



美術新人賞受賞作品『19.25』

# 『令和2年度 五島記念文化賞』



12年大学院版画修了の庄司朝美さんが  
美術新人賞を受賞



庄司 朝美  
12年大学院版画修了

「これから一生何があっても描き続けるのだ」と意志を固めた

今回の受賞により、今まで漠然と感じていた「これから一生何があっても描き続けるのだ」という強い意志がはっきりと固まったように思います。また、海外での活動も視野に入れて考えるようになりました。海外研修先をジョージア共和国に決めましたが、コロナ禍の影響で渡航が延期となり、2022年の2月に出発予定です。まだ先は見通せませんが、今できることを一つひとつ進めていこうと思っています。まずは海外研修の機会を存分に活用し、テーマや表現方法を現地で深めていきたいと考えています。

私個人の実感として、学生のうちは作品の完成度や世界観を作り上げることを目指すより、たくさん実験し、遊び、興味の赴くままに貪欲に学ぶこと、それに尽きると思います。4年間は長いようで何かを成すには短い時間です。自分でもよく分からないものを作ったり、見たりして、いつか何かを成そうとする時のためのリソースを蓄えてほしいと思います。

芸術文化分野の有能な新人に  
海外研修費用を助成する賞

東急財団(旧五島記念文化財団)主催。優れた芸術活動を行う新人や団体を顕彰するとともに受賞者には海外研修の費用を助成し、日本の芸術文化の向上と発展に貢献してきたが、31回目の開催を迎えた本年度をもって終了となった。過去には日本画の岡村桂三郎教授や武田州左教授、油画の石田尚志教授も受賞。

## 令和2年度 五島記念文化賞贈呈式



昨年10月に行われた「令和2年度 五島記念文化賞」贈呈式の様子。前列右から1人が庄司朝美さん。美術新人賞1名、オペラ新人賞2名の頭影とオペラ公演助成4団体に贈賞が行われた。

# 『JAGDA 新人賞 2020』

10年グラフィックデザイン卒業の佐々木俊さんが受賞



所蔵作品展「デザインの(居)場所」(c: 東京国立近代美術館)  
「デジタルの中からそのまま飛び出したようなグラフィックが、独特な空間を作り出している」(柿木原政広氏)など、佐々木さんの作品は選考委員から高い評価を得た。(年鑑「Graphic Design in Japan 2020」に掲載された選考委員コメントより引用)



昨年9月、東京・銀座の『クリエイションギャラリー G8』で行われた「JAGDA 新人賞展 2020 佐々木俊・田中せり・西川友美」の様子。

## 佐藤可士和客員教授や水野学氏なども過去に受賞

日本グラフィックデザイナー協会(JAGDA)が毎年発行する会員作品集・年鑑『Graphic Design in Japan』出品者の中から今後の活躍が期待される39歳以下の有望なグラフィックデザイナーに贈られる賞。1983年の創設時から第一線で活躍する多くの異才を輩出しており、受賞経験を持つ本学教員も多い。



佐々木 俊  
10年グラフィックデザイン卒業

## 受賞は名前や作品を多くの人に届けるチャンス

独立してから、運良くそれなりに仕事もありました。しかし、来た仕事を「それなり」にこなすだけで本当にいいのかな?とモヤモヤすることが増えていました。グラフィックデザイナーとして自分が停滞している気がして、その環境を変えるつもりで年鑑に出品しました。学生の頃は、この賞を受賞すること自体スゴいことだと感じていましたが、いざ自分が賞をいただいてみると、まだまだ実力不足であることを実感します。「これからちゃんと頑張れよ!」というメッセージを賞という形でもらったのだと思っています。一方で、受賞によって多くの方々に自分の名前や作品を知ってもらえたということは、デザイナーにとって大きなチャンスです。これを無駄にしないように、丁寧な物づくりを続けたいと思います。これから学外コンペなどに挑戦しようとしている学生の皆さんには、自分が本当に見せたいものを楽しんで作ってほしいと思います。賞に応募すること自体は、創作にとって必ずしも重要なものではありません。気楽に、だけども真面目に取り組むことが何よりも大切ではないでしょうか。



「JAGDA 新人賞展 2020 佐々木俊・田中せり・西川友美」展覧会ポスター



書店のフェアポスター「詩 デザイン」(c: 代官山 蔦屋書店)

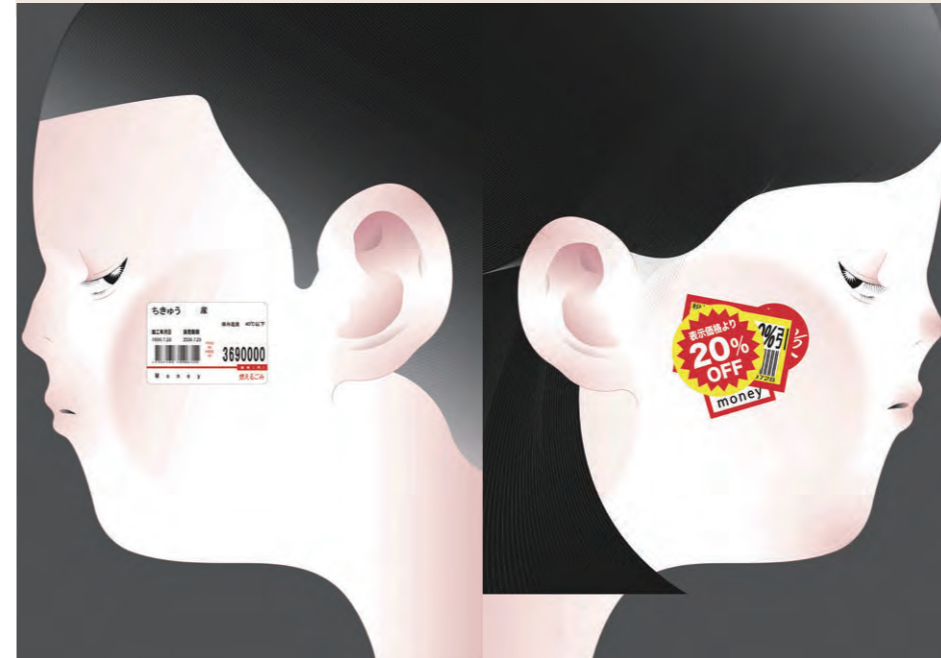
# 『JAGDA 国際学生ポスターアワード 2020』

グラフィックデザイン4年の趙文欣さんがグランプリを受賞



## 「Money」をテーマに世界23の国と地域から1,980作品が集まった

JAGDA主催で国内外の優れた若い才能の発見と顕彰、およびグラフィックデザインの新たな発展と進化を目的に創設されたコンペティション。ポスターはイメージとテキストの融合による自由な表現、人の心を動かす瞬発力があり、国や地域を超えたビジュアルコミュニケーションが可能なメディアであることから、世界各国の学生を対象とする。今回は「Money」をテーマに作品を募集。23の国と地域から1,980点の応募があった。グランプリ受賞の趙さんをはじめ、グラフィックデザインと統合デザインの学生らが多数入賞した。



グランプリ受賞作品「Don't put a price tag on me」  
「未だに若い人を価値のみで見る社会を風刺している作品だが、2枚のイラストの対比と悩む若者の独特な表情、ダイナミックな構図に対して繊細に描かれた目の対比などが実に見事」(佐藤卓審査員長/展覧会図録より引用)と評価された。



趙文欣  
グラフィックデザイン4年

## 明確な構想が「伝わるデザイン」を生み出す秘訣

今回の課題「Money」は非常に現実的なテーマでしたが「お金」を直接的に表現することは避けたいと考えました。そして、自分なりに「Money」の意味や価値について深く掘り下げ、その全てを作品に注ぎ込みました。この受賞を通し、制作の初期段階で「明確な構想」をもつことはとても重要であることがわかりました。自分のアイデアをはっきりとイメージすることで、見る人に共感してもらえる作品に仕上げることができると感じます。ポスターは紙一枚で、独自の表現を使って情報を伝えるという目的がありますが、今後は平面的なものだけでなく、もっと新しい形の作品に挑戦したいと考えています。たくさんの人におもしろいと感じてもらえる作品を作りたいです。

先生から学生へ  
「欲」を持ち、失敗を恐れずに挑戦してほしい

グラフィックデザイン学科には、周りとの切磋琢磨できる内容の濃い授業がたくさん存在します。毎年多数の受賞者が生まれる背景には、そこで日々鍛えられる多彩な創造力がベースにあるのでしょう。「学外コンペ」という目標に挑戦する気概のある学生は普段のプロジェクトにおいても魂を込めて打ち込んでいます。もちろんコンペには当落があり、その努力が報われない場合もありますが、一喜一憂することなく、仲間たちと繰り返すトライ&エラーの日常をとにかく大切にすることが重要です。そして、地に足をしっかりとつけ、且つ成し遂げたい自分らしい「欲」を持ちながら、失敗を恐れずに挑戦し続けて欲しいと思います。学生時代とは、自身が目指す純粋なクリエイションを思う存分開花させる絶好のチャンスでもあるのです。



澤田 泰廣  
グラフィックデザイン教授

# 『日本タイポグラフィ年鑑 2021』

グラフィックデザイン4年の原田陽奈子さんが学生部門でベストワーク賞を受賞



学生部門ベストワーク賞受賞作品「うごくかん字」  
漢字の形の面白さに着目したビジュアルブック。240字をデザインし、ページに開かれた窓によって全てが「形のしりとり」のようにつながる。ページをめくる楽しさが体感できる紙の本ならではの効果を追求した。

## タイポで表す文字とデザインの可能性を評価

さまざまなコミュニケーションで必要とされるタイポグラフィの巧みな姿を収録する『日本タイポグラフィ年鑑2021』。その応募作品の中から優れた作品にグランプリ、部門ごとのベストワーク賞などが贈られる。

# 『JID AWARD 2020』

「ネクストエイジ部門賞」で  
環境デザイン卒業生2名が  
審査員賞を受賞



ネクストエイジ部門賞・大田昌司賞受賞作品『ペーパーコードの新たな魅力を探求する』  
半田晴菜(20年環境デザイン卒業)

## 才能ある若きインテリアデザイナーの 発掘と優れた活動成果を表彰

日本インテリアデザイナー協会主催のアワードで、日本のインテリアデザインの質的向上をはかり、暮らしにおけるインテリアの重要性、デザインの力を社会に発信することを目的とする。1969年の発足以降、デザイナーや企業などの優れた活動成果を表彰している。今年度、若い才能を発掘する「ネクストエイジ部門」で、環境デザイン学科の卒業生7名が部門賞を受賞。さらにその中から、14年卒の中澤健太郎さんと20年卒の半田晴菜さんが審査員賞を同時受賞した。



ネクストエイジ部門賞・賞勝人賞受賞作品『pt Shelf』  
中澤健太郎(14年環境デザイン卒業、Interior Studio LETTER.所属)

# 『第18回 JIA 関東甲信越支部 大学院修士設計展 2020』

19年大学院環境デザイン修了の王琳さんが最優秀賞を受賞



先生から学生へ  
勝てば大きな自信に、  
負けても悔しさは  
必ず次のステップになる



最優秀賞受賞作品『階段空間とその周囲の場の連続』

## 東京藝大、筑波大など24の大学院が 建築の研究成果を競う

日本建築家協会(JIA)主催で2003年から行われている、建築の研究成果と完成度を評価するコンペティション。東京芸術大学や筑波大学、早稲田大学、東京工業大学など24の大学院から44点の応募があった。階段空間を切り口として建築家の作品において捉えられる特質を研究し、その隣接空間との連続性を模索すると同時に建築の可能性を広げたいと考えた王琳さんの作品が最優秀賞に選ばれた。

# 『第12回ハーフェレ 学生デザインコンペティション2020』

環境デザイン3年生4名のグループが最優秀賞を受賞



## 建築・インテリアを学ぶ学生を支援するコンペ

ヨーロッパの家具用金物などを輸入販売するハーフェレジャパンの主催によるコンペティション。建築・インテリアを学ぶ学生たちの支援を目的に2009年より開催している。今年度は『世界のどこかにたつ家』を課題に設定。全国から約250点の応募があった中から、環境デザイン3年のチョウシカさん、伊藤さくらさん、オウカブンさん、鈴木あかりさんの4名によるグループ作品『辺境の境』が最優秀賞を受賞した。



授賞式の様子。学生が作品のポイントや受賞の喜びを語る映像が公式サイトで公開されています。



米谷 ひろし  
環境デザイン教授

『JID AWARD』には毎年学部生と大学院生の卒業・修了制作の中から優秀作品を選出して出展しています。今回の7作品は、コンセプト・写真・図面といった作品表現の総合的なレベルが非常に高く、評価のポイントにつながったと考えています。今年度の受賞作は、実用性がありながらも従来の家具とは違った独自性を備えており、学内での学びが生かされていると感じました。アワードに出展できるレベルにまで仕上げるには大変な努力が必要ですが、勝てば人生における大きな自信となり、負けてもその悔しさは必ず次のステップに生かすことができます。一人でも多くの学生が野心を持って受賞を目指し、作品の世界を大きく広げていくことを願っています。



『The Balloon Catcher』

# 『DigiCon6 JAPAN Awards』

19年大学院グラフィックデザイン修了の  
金子勲矩さんが最優秀賞を受賞



本作はフランス・アマシー国際アニメーション映画祭の卒業制作部門にノミネートされたほか、日本映画テレビ技術協会主催の「青い翼大賞」受賞、「INTERNATIONAL STUDENTS CREATIVE AWARD 2020」松本俊夫賞を受賞するなど、数々のアワードで高い評価を受けた。

アジアから369点の映像作品が  
集まったTBS主催のコンテスト

アジアの16地域から優れたコンテンツクリエイターを発掘することを目的に毎年行われており、今回で22回目の開催となる。その日本大会で金子さんの作品『The Balloon Catcher』が369点の応募の中から最優秀賞にあたるGoldを受賞。昨年11月には中国、香港、シンガポールなど地区別選手権を勝ち進んだクリエイターたちと最終ステージで競い合った。

学外アワードへの挑戦でモチベーションを高める

大学院では、頭が「もの」で、体が「人」の「換頭人間」を使った作品を制作してきました。特に今回は、換頭人間どうしの関わり合いを描くなかで、キャラクターの見た目の印象と内面の違いを表現することにこだわりました。アニメーション制作は非常に時間がかかるため、見る人にちゃんと伝わるか、独りよがりになりすぎではないかなどと悩むことも多いです。しかし、数々の受賞をきっかけに、自分の進む道に自信がもてるようになりました。学外アワードは専門家や仲間との交流を通じ、新たな視点からアドバイスを受けることができるチャンス。ノミネートされれば制作のモチベーションも上がりますので、ぜひ挑戦してほしいと思います。



金子 勲矩  
19年大学院グラフィックデザイン修了  
グラフィックデザイン助手

# 『the GIFs 2020』

プロダクトデザイン2年の田野倉凜さんがU-22部門賞を受賞



『3秒で心揺さぶる動画』を評する  
唯一無二のコンテスト

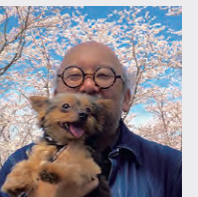
株式会社GIFMAGAZINEとアドビ株式会社による共同開催。わずか3秒の超短尺動画「GIF」で人の感情を動かすクリエイターを応援する目的で2014年から行われている。今年度は公式TwitterやInstagramでノミネート35作品が紹介され、コメントや「いいね」などの数も審査の参考となった。昨年12月に行われた最終審査で14作品がグランプリを含む各賞を受賞した。



『オヤスミディスク』  
寝ている間に繰り広げられるストーリーを表現。  
躍動的なリズム感が高評価を得た。

先生から学生へ  
アニメーションの可能性は無限大

近年、短編アニメーションの世界は進化が著しく、アワードでの入選・受賞が年々難しくなっている中、金子くんの作品が数々の賞を受賞したことは大変名誉なことです。受賞作の魅力は優れたオリジナリティにあり、芸術的表現や斬新なストーリー、独自の画風が高く評価されました。受賞経験はその後の制作活動における原動力。また、受賞によって海外からのサポートや助成を受けるチャンスを得ることもあり、将来につながる大きなステップになるでしょう。日本のアニメーションの可能性は無限大。皆さんの次なる挑戦を楽しみにしています。



野村 辰寿  
グラフィックデザイン教授

# 『第25回 日本絵本賞』



## 95年油画卒業の 田中清代さんが大賞を受賞



『くろいの』(偕成社)

子供たちに読んでほしい一冊として昨年出版された絵本1,165冊から選出

絵本芸術の普及と発展に寄与することを目的に、1年間に日本で出版された絵本の中から優秀作品に贈られる『日本絵本賞』。今年度は全国学校図書館協議会選定委員会によって選定された1,165冊から30点が最終候補に選ばれ、田中清代さん作絵による『くろいの』が大賞に輝いた。

### 美術作品は「見る人」との コミュニケーションなしでは成り立たない

16年ぶりに作絵を手がけた『くろいの』は、全64ページすべてをモノクロームの銅版画で仕上げた作品です。銅版画は制作にとても時間がかかるのですが、濃淡を駆使した奥行きのある空間を描きたいと思っていましたので、子どもの誕生を機に、その思いのすべてを凝縮しようと挑みました。女性として、とりわけ母として、子育てをしながら作家活動が続けることの大変さを感じることもありました。今回の受賞が私の人生において大きな自信と達成感を与えてくれました。アワードに応募することに不安や迷いは誰にでもあってもいいと思います。でも、一歩踏み出すことにより、作品の評価だけでなく社会や人とのつながりが生まれ、自分自身を振り返るきっかけにもなります。美術作品は「見る人」とのコミュニケーションなしでは成り立たない、と私は考えています。これから作家を目指す方々が、作品を通して世界とつながり、たくさんの刺激と発見と喜びを実感してほしいと思います。



田中 清代  
95年油画卒業

# 『第24回 手塚治虫文化賞』



## 07年映像演劇卒業の 田島列島さんが新生賞を受賞

### 清新な才能をもつマンガ家に贈られる賞

日本のマンガ文化の発展に大きな役割を果たした手塚治虫氏の業績を記念し、マンガ文化の健全な発展に寄与することを目的に1997年に創設された。新生賞は1年間に国内で発表されたマンガの中から、斬新な表現、画期的なテーマなど清新な才能の作者に贈られる。

### 学生時代には「自分の無力さ」を味わうことも大切

マンガの制作においては、わかりやすさを一番に心がけています。編集担当の方に誤解されたところなどは、説明過多なくらいに描き直します。受賞する前も今も、おそらく未来も変わらないのは「死に物狂いで創作すること」です。生活は楽になっても制作は楽にならないというのがわかりました。大学時代に、よく先生に「他人に興味を持って」と言われました。以来、なるべく自分の内側よりも外の世界に興味を持つようにしたことは、創作活動にもプラスの影響を与えてくれました。学生の時には視野を広げ、少し無理なことにも挑戦してみてください。思いきり自分の無力さを味わうのも良いことだと思います。



田島 列島  
07年映像演劇卒業



『水は海に向かって流れる』(講談社)  
家族や男女の機微を柔らかな絵と言葉で表現する独自性が評価された。

第5回

# 多摩美への期待と実績



多摩美出身者は、ビジネスの最前線からどのような評価を受けているのか。また、その卒業生たちは多摩美での4年間の学びを、ビジネスの現場でどう生かし、活躍しているのか。さまざまな業界で活躍する企業人たちに、いま多摩美に求められる期待と実績について伺いました。

さらに詳しい内容や、その他の企業情報はWebでご覧いただけます。

コンサルティング

## アクセンチュア

アクセンチュア株式会社=世界51カ国に拠点をもち、50万5,000人の社員数を誇る世界最大級の総合コンサルティング会社。世界中の企業の総収益ランキング「フォーチュン・グローバル500」の上位100企業のうち91社が同社のクライアント。

### 多摩美生は感覚値だけで物事を捉えるのではなく、 社会への実装を設計できる能力があると感じる

会社説明会を行うため多摩美を訪れた際に、統合デザイン学科の取り組みと、弊社のインタラクティブ事業部の考え方、取り組み姿勢に強い親和性を感じました。その結果、昨年は、4名に内定を承諾いただきました。実際に統合デザイン学科の学生のお話してみると、単に「面白いアイデアでしょ?」ではなく、着眼点は面白いままプロダクトとして世に出て行くところまでを想像して設計されていました。その思考力や具体的な提案に落とし込む能力は、正直すごいと感じました。また、弊社は、デザイナー、マーケター、コンサルタント、エンジニアなど多彩な人材が所属していますが、彼らを巻き込んでプロジェクトを推進することが重要です。その点においても、多摩美生の資質に期待するところが大きいです。



シニア・マネジャー  
インタラクティブ本部  
佐藤 守さん

### 一芸に秀でる道も、そうした人を取りまとめる道も どちらもプロフェッショナルだと知って目指してほしい

僕は以前、広告代理店でアートディレクターをしていたのですが、今は少し違った立ち位置で仕事をしています。もちろん自分のデザインやアウトプットで世の中にインパクトや感動を与えたいという思いもありますが、自分の資質や長所を生かせるポジションは違うのではないかと。優れた才能を持った人たちと連携し、その人たちの力を視覚的なアプローチで世の中に提示する立場が向いていると考え、現在のポジションに就きました。多摩美に限らず美大の学生の多くはプロフェッショナルを目指していると思いますが、多彩なジャンルの職人が集まって何かを作り上げようとする時、それを取りまとめるのもまた職人だと思うんです。アクセンチュアではよくコラボレーションという言葉を使いますが、力のある人たちが声を掛け合い、助け合いながらプロジェクトを進めるケースが多々あります。個人で何かを成すというより、チームで何かを成す方向へと変わってきています。また、クライアント企業や生活者のニーズも多様化していることから、今後はより能動的な姿勢や社会的なコミュニケーション・スキルが求められると考えています。一芸に秀でるのは素晴らしいことですが、幅広い視野を必要とするクリエイティブの世界もあることを、学生の皆さんにも知っていただけたらと思います。



シニア・プリンシパル  
Fjord Visual Design Director  
Yoo Taehanさん

IT・エンタテインメント

## サイバード

株式会社サイバード=「IT×エンタテインメント」をベースに、全世界で累計会員数3,000万人を超える女性向け恋愛ゲーム『イケメンシリーズ』をはじめ、ゲーム/コンテンツ事業など、国内外へ幅広く展開。また、Voice UI市場にもバイオニアとしていち早く参入し、Amazon Alexaスキル開発エージェンシーにも認定。

### デザインに対する基礎力の高さ、 それを業務に応用する柔軟性が多摩美生の魅力

新卒・既卒を含め、多くの多摩美生が弊社で活躍しており、総じて基礎力が高いという印象です。それを業務に応用する柔軟性もあり、就学を通して基礎が確立されていると感じます。また、私が面接を担当し入社に至った方たちに共通していたのは、「学生時代に人と一緒に一つのものを作り上げた経験がある」ということでした。それも、ご自身が主幹となり、周りの人を巻き込みながらチームを推進されていたとのこと。この経験は社会人になっても必ず生きてくると思います。特に弊社はチームで物事を進めることの多い職場環境なので、そういった経験を通して、「自分が作りたいもの」ではなく、「お客様が何を求めているか」というお客様目線の発想で柔軟に仕事をしていただける方が適していますし、弊社を就職先として選んでいただける多摩美の卒業生に期待している点でもあります。



コーポレート統括本部 戦略統括部  
コーポレートコミュニケーション部  
新卒採用責任者  
川尻 真由香さん

### 「なんでもやりたい」入社1年目から 幅広く挑戦できた経験はサイバードならではの

入社当初から『イケメンシリーズ』に携わり、現在は『イケメン戦国◆時をかける恋』という恋愛ゲームのアドバイザー部分の素材制作を担当しています。中学の頃から友だちと一緒にゲーム作りを始め、親にも「将来はゲームを作る人になる」と宣言していました。そんな昔からの夢を実現させることができました。

多摩美を選んだのは、卒業生の作品に大きな感銘を受けたことがきっかけでしたが、版画専攻からゲーム会社に就職する人が意外と多いことを知り、さらに多摩美への思いを強めました。入学後は専攻での授業以外に、時間を見つけては友だちと一緒にゲームを作っていましたね。

入社後、最初に配属されたのは、新規ゲームを開発途中のチームでした。上長に「なんでもやりたいです」と伝えたのですが、UI(ユーザーインターフェース)やキャラクターの衣装デザイン、外注先への依頼書作成など、1年目からすごく良い経験をさせていただけたのもサイバードならではの経験だと思います。また、弊社には事業化できそうなアイデアを社員が発表する場があるのですが、将来的には自分のアイデアをデザイン視点から企画にして実現できたらいいなと思っています。



グラフィックデザイン統括部  
上木 舞花さん  
17年版画卒業

## Interview

GU×MIHARAYASUHIROのスペシャルムービー制作で  
人気クリエイター2人のタッグが実現

# 多摩美は「明日」を つくる場所 そこからすべてが はじまった

卒業生のデザイナー・三原康裕さんが主宰する「MIHARA YASUHIRO」が若者に人気のファッションブランド「GU」とコラボレーション。同じく卒業生で映像作家の林響太郎さんとタッグを組み、八王子キャンパス図書館でのスペシャルムービーの撮影が実現しました。その完成と公開を機に、撮影秘話や学生時代のことなどについてお話をうかがいました。



デザイナー

## 三原 康裕

みはら やすひろ  
(97年染織デザイン卒業)

PROFILE

1972年長崎県生まれ、福岡県出身。大学在学中に独学で靴を作りはじめ、1996年に靴メーカーのバックアップによりオリジナルブランド「archi doom」を立ち上げ、翌年1997年には、自身のレーベル「MIHARAYASUHIRO」を立ち上げる。2004年ミラノコレクションに初参加し、2007年からは「VIRI」コレクションでの発表を続けており、ウェア、シューズともにデザイン性の高さと素材へのこだわりが国内外から高い評価を受けている。2020年「General Scale」という環境的責任を掲げたブランドをローンチする。

映像作家

## 林 響太郎

はやし きょうたろう  
(13年情報デザイン卒業)

PROFILE

1989年生まれ、神奈川県出身。大学卒業後、DRAWING AND MANUALに参加。映像のみならずインスタレーションやプロジェクションマッピングといったさまざまなクリエイションに関わる。星野源、Mr.Children、米津玄師、BUMP OF CHICKENなど多数のアーティストのMVを監督。2016年「ベネチア・ビエンナーレ」特別賞、「ADFFEST2019」プロモーション、SSMA 2020 BEST VIDEO DIRECTOR受賞など受賞歴多数。



GU×MIHARAYASUHIROの撮影は八王子キャンパス図書館で昨年末の冬季休業期間中に行われた。1階のアーケードギャラリーから2階の開架エリアまでをフルに使い、スチールとムービーで1日がかりの大規模なロケとなった。

2月10日、三原さんのショールームにて取材

## 大人たちはちゃんと若者たちを見ていると伝えたかった

### 「美大生」をモチーフにした企画で 多摩美タッグを結成

— 今回、おふたりがタッグを組んだきっかけを教えてください。

三原 GUからお話をいただいたのが2020年の3月で、世間がコロナ禍に陥るタイミングでした。その後、緊急事態宣言が出され、大学が休みになったり就職活動に支障が出たりしているといった話を聞くうちに、若い人たちにに向けて何かメッセージを発信したいと考えて。僕自身が多摩美の学生だったこともあります。次の時代を創造する若者のアイコンとして「美大生」をモチーフにしたファッションをデザインすることになりました。そのCMを撮影するにあたり、ぜひ多摩美の図書館で撮りたいと思ったんです。僕がいた頃にはなかった建物ですが、建築家の伊東豊雄さんの設計で、いろんなメディアで取り上げられていて、卒

業生として誇らしかつた。映像監督も多摩美の卒業生がいいなと思い、林さんにお声がけしました。林 シンプルにうれしかったですね。三原さんと一緒にお仕事ができることも、学生時代に慣れ親しんだ多摩美の図書館で撮影ができることも。

— 三原さんは林さんに、どんな風にオファーをしたんですか？

三原 僕、林さんに3分くらいしか説明していません。「グッド・インスピレーション」というテーマで、学生に向けたもので、ちょっとサステイナブル。それしか言ってない。林 あとは図書館がロケ地だってことくらい(笑) 三原 「こんな映像にしてほしい」というのはちょっと言ってみただ、素人ですけど。そしたら「ちょっと何を言ってるのかわかりません」と言われて。林 ほんと、わからなかったんです(笑) 三原 林さんって怖いなあって思って。名前も作

品も知っていたけど、けっこう怖い若者なんだなあって(笑)

林 ははははは。まさかそれで怖いって思ってたとは思ってなかったです。

— どうしてあまり説明しなかったんですか？

三原 これは賭けじゃなくて、僕の中での正攻法なんです。コラボするうえでいちばん良いのは、林くんが「いや、ここだろう」と感じたポイントを優先してくれること。林くんは今多摩美で講師として学生と過ごしているし、林くんが見ている図書館の風景の方がリアルだと思うから。林 実はそれ、さっき初めて聞いて知ったんです。だから最初しばらくはすごく探りを入れながら三原さんのことをじっと見てました(笑)。三原 昔、ロシアのバレエ団とイギリスのオーケストラが10分という長さだけを決めて、それぞれ別々に練習して後日ひとつのホールで上演

するという実験があって。それが本当に素晴らしかったんですよ。まるっきりズレるところもあるんだけど、パチッと合うところもある。コラボレーションというのはそういう「化学反応」があって、どうなるかわからないってところが楽しいし、それがいちばんの醍醐味だと思って、あえて伝えなかったんです。

### 現場での化学反応から 「奇跡」が生まれた

— 出来上がった映像を見ていかがでしたか？

三原 もうね、奇跡。ロングバージョンの方は特に。林 ははははは(笑) 三原 階段で男の子と女の子がすれ違うシーンが、まるでほんとに同じ時間に撮った感じになるの。林くんがストップウォッチで計りながら人を動かしていったんじゃないかって思うくらいびびったり。でもそうじゃなくて、歩くスピードも席を立つ

シーンも全部モデル任せで、急かすわけでもなく、すーっと一連の動きがあってそこに来る。それはね、ちょっと鳥肌ものだった。林 あれは本当にたまたまです。でもやっぱり現場のいちばん面白いところってそういうところだあっていうのはありますよね。たとえば僕があれこれ計算して「あなたは15秒で歩いてください」とか指示をしたら、モデルさんが自然体じゃなくなっちゃう。ラフにそれぞれの感覚でやってみたら、うまくいったって感じです。三原 大ききかもしれないけど、よくあんなムードで撮れたと思う。ます知的。やっぱり林くんは知性があるんだなと思った。林 ははは。いやいやいやいや、多摩美は補欠合格でしたよ(笑) 三原 ものすごく勉強家ですよ。モデルの動きも林くんの中ではたぶん最初からイメージがあった。「GU×MIHARAYASUHIRO」を見せるっていうのが最優先でも、空間が意識できる映像で、多摩美の図書館を舞台にしている意味をちや

んとわかって作ってくれていた。すごく作り込まれた感じがあって、強くて上品な映像になっていた。林 良かった、そう言ってもらえて。

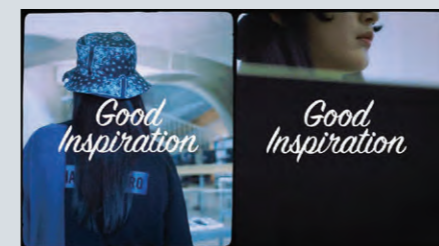
— 途中で三原さんも登場されていましたね。

三原 「ここに座って」って言われて。どのぐらいのタイミングでカメラが来るのかわからないから、「まだ来ない？ まだ？ やっと来た！」っていう感じでそわそわしてた(笑) 林 スタッフみんなでその場で話し合いをして、三原さんの時間をちゃんと作るうって。三原 思いつきなんです。それも意味「化学反応」ですね。

— 多摩美の学生有志もエキストラとして参加していて、撮影前には三原さんが学生たちに熱いメッセージを送ってくれました。

三原 (笑)。あの時はちょっと感情的になっていた部分がありました。林 確かにとても熱がこもってましたよね。あの

## 三原さんと林さんが手掛けた「GU×MIHARAYASUHIRO」のスペシャルムービー



「GU×MIHARAYASUHIRO」の  
スペシャルムービーは  
こちらからご覧いただけます▶



### 新しい表現や戦い方を見つけて、時代のその先を提示する人に

スピーチを聞いて、改めてすごい先輩だなぁって思いました。

**三原** 「GU×MIHARAYASUHIRO」のデザインを考えていた時は自粛期間で、ひとりでアトリエにすることが多かったせいか、プライベートなコレクションにしたいという気持ちが強かったんです。もっとポップで軽いテーマの方がいいのかなと思ったこともあったんですけど、こんな世の中でも大人たちはちゃんと若い子たちを見ているし、応援しているよってしっかりと伝えたかった。

**林** なるほど。

**三原** 特にクリエイションをやる子たちって、どこかで自分の力を見限ったりする時があると思うんですよ。誰もが自分の才能の無さをどこかで感じながらも努力していくっていう。その繰り返しじゃないですか。僕自身も学生時代は大変だったけど、多摩美で過ごした4年間があって、今の僕がある。恩返しをしたいという気持ちで、あの場を借りて自分の思いを伝えさせてもらいました。

#### 未来への一步を踏み出す時、友達や先生が背中を押してくれた

—— 学生時代はどう大変だったんですか？

**三原** まず、大学に入ること自体が大変だった。僕らの世代はベビーブームで、50人に1人しか受からないような、浪人するのが当たり前の時代だった。福岡の画塾っていう美術予備校に通っていたんだけど、二浪が確定してからはもう本当に毎日が修行だったね。ほぼひとりで絵を描き続けてた。

**林** ものすごい倍率だったんですね。

**三原** 入った後も、周りはみんな絵がうまいやつばかり。どいつもこいつも天才だった。びっくりするくらい良かった。でも、いくらうまくても、独自性がないとどンドン潰れていっちゃうから。それで切磋琢磨できたかな、4年間。

**林** 多摩美を選んだ理由とかあったんですか？

**三原** 当時、多摩美の染織デザインには粟辻博さんがいたんです。僕にとってはデザイン界の唯一無二な存在の人。粟辻さんや田中一光さん、三宅一生さんは憧れの巨匠でした。しかし、僕が3年生の時に粟辻先生は亡くなられてしまって、残念なことに粟辻さんの授業は受けられなかった。それで「代わりになる人は世界中のどこにもいない」存在にならなければと思いました。

—— 林さんはもともと映像志望だったんですか？

**林** いえいえ、全然。僕も一浪して情報デザイン学科に入って、2年生の時にたまたまクラブのVJをやっている友達ができ、面白そうだなと思ったのがはじまりです。

**三原** おしゃれだなー。

**林** AXISの宮崎光弘さんが教授でいらっやっただのも大きかったですね。1年生の時からよく話しかけに行っていました。

**三原** そういう活動能力があるんだよね。

**林** いやいや。でも僕が多摩美に入りたくなって思ったのは、バスを降りて坂を登って、緑の中にコンクリートの塊がいっぱいあるのを見た瞬間。「ああ、こめちやめちやい感じだな」って思ったのをすごく覚えています。図書館も含めて。

**三原** きれいになって良かったですね。僕らの頃はプレハブの建物が茶畑みたいに連なっていた(笑)



—— おふたりの世代のギャップってどれくらいあるんですか？

**三原** 僕が今48歳で、林くんはいくつ？

**林** 31歳です。

**三原** 平成生まれ！だからこそなんですよ。平成

3年ぐらいにバブルが崩壊して、大人たちが世の中に暗い話題を流しだした後からしか生きてないから、林くんはある意味「被害者」なんです。

**林** ははははは！そっかそっか。

**三原** それまでは学歴社会で、良い大学に行けば良い就職先があって、終身雇用っていう虚像があったの。バブルの崩壊で本当に虚像だったことが露見したんだけどね。僕は運が良かったことにちょっとひねくれていたところがあったから、「終身雇用なんてありやしねえだろ」ってどこかで思っていて。それで大学3年で自分のブランドをはじめたんだ。

**林** そうだったんですね。

**三原** 今もコロナ禍で学生みんなは本当に大変だと思う。でも、それも長い人生から見たらほんのちよつとのことなんだよ。「自分はこれから何を作って生きていくのか」っていうことを考えたら、良い会社に就職できたとかできなかったとか、そういうことで自分の力が決まってしまうってことはないんだ、絶対。

**林** うんうん。

**三原** 僕は学生の時に独立して良かったって思ってるけど、でも、自分の意志だけで決め切れたかというところじゃない。やっぱり当時の友達とか先生、周りの大人たちが背中を押してくれて、勇気を与えてくれた。あの時多摩美で出会った人たちの誰か一人でも欠けていたら、今頃どうなっていたか。

**林** 人との出会いは僕もそうですね。友達も教授陣もみんなそれぞれの価値観を持つてるから、いろんな刺激を受けられた。

**三原** 意外と学科を越えて仲良くなりますよね。勝手に他のところの授業を聴きにいったりとかあったでしょ？

**林** ありましたありました。僕はもともとグラフィックデザイン学科志望だったから、グラフの友達に授業内容を聞いて図書館で調べたり。

**三原** そうだね、大学に行っていちばん良かったなって思うのは、アートやデザインが好きな同世代の子たちが日本中から集まる環境だったこと。とにかく熱量がすごかったよ。蛭川実花ちゃんもラーメンズも、ラーメンズと一緒にやっていたニ



ルセンも、学生当時からメキメキ活動してた。染織デザインの同じクラスにはKIGIの植原亮輔や資生堂の成田久もいた。

**林** キューちゃん、同級生ですか？ほんとに？

**三原** キューちゃんはライバルだったから(笑)。みんなすごい才能があって、「明日」をつくる人っていうのはこういう人間なんだなって思った。でもやっぱりそれだけじゃないのよ。作ってるものがそれぞれ違うから、お互いに高め合えた。

**林** 大学で出会った友達って大事ですよ。僕はライバル意識っていうのはそんなになかったけど、「あいつ、こんなに頑張っているんだな」って励みになった。

**三原** そうだね。あらためて振り返ってみても、多摩美でのいろんな出会いが自分のスタート

だったと思うね。

—— そういう意味では、今回の出会いも新たなスタートに？

**林** もう、本当にそうです。

**三原** 僕も17歳年下の林くんと一緒に仕事できて本望です。

**林** ははは！やめてください、ほんとに。怖いから(笑)

#### 作らないことには何もはじまらないとにかく作って、見てもらうこと

—— 最後に多摩美の後輩たちに、そしてクリエイターを目指す全ての人にメッセージをお願いします。

**林** いろんな良いもの、美しいものを見るきっかけになる「遊び」をやってみるといいと思いますね。大学だけじゃなくて、外の世界にもふれてみたい。

**三原** 同感です。美しさを勉強すること、本当の意味で。何が正しいかってことがわかるようになると思う。それからとにかく作品を作って、たくさんの人に見てもらおう。人との出会いがいっぱい世界が広がっていくんだ。有名になっている人で何もやっていない人なんかいない。僕も学生の時はとにかく必死に作りまくっていた。やっぱり作らないことには何もはじまらないんだよ。

**林** 確かに。僕は今の方が「もっと作らない！」って思ってる。大学の頃からそう思っていたら良かった。

**三原** 僕も今でも、3日も空いたら「なにかやらなきゃ！」ってなる。

**林** すごくわかります、その気持ち。

**三原** たぶんね、焦った方がいいと思うの。テクノロジーとアートの戦いなのか、あるいは共生なのか、僕たちは今、100年に1回の大革命が起きるような時代の変革期の最中にいる。一生懸命勉強して時代についていこうっていうことも含めて、何か新しい表現だったり戦い方だったりを見つけた方がいいってことを若い子たちにも伝えたいね。モノやコトを生み出せる僕たちは、時代のその先を提示する側にならなきゃいけないんだから。

「美大生」がモチーフならではの機能的なデザイン



今回のコレクションは三原さんが美大生だった自身の学生時代を思い出しながら、創造力で世界を明るくしたいという思いを込めて作ったもの。『Good Inspiration』というテーマやメッセージがデザインに盛り込まれているほか、ペン差せるポケットやIDカードのケースなど機能性のある仕掛けが遊び心をくすぐります。

三原さんからエキストラの学生たちにエール



図書館での撮影開始前に行われた、エキストラとして参加した学生たちとのミーティングの中で、三原さんは「GU×MIHARAYASUHIRO」のコンセプトにもなっている“NEVER BEND YOUR HEAD. ALWAYS HOLD IT HIGH.(下を向くな、上を向け)”の言葉を贈り、「コロナの影響もあって将来がとて暗く見えていると思う。だからといってこの暗さと同じ方向を見ていても仕方ない。君たちのクリエイションで次の時代をつくってほしい」と力強く話しました。



# 追悼 2019-2020

長年にわたり多摩美を支えた先生方の在りし日をしのび、ゆかりの方々に寄稿いただきました。



**本江邦夫** 名誉教授  
1998年～ 教授(共通教育)  
2004年～ 大学院美術研究科長  
2019年～ 名誉教授・附属美術館長  
2019年6月3日 逝去 70歳

## 本江邦夫さんの足跡を偲ぶ

学長 建島哲

本江邦夫さんが一昨年の6月に世を去られてから、早いものでもう2年近くになる。長年にわたる多摩美術大学での教員生活を終えられたばかりで、新たに就任した附属美術館長の仕事に意欲を湧かせていた矢先の急逝であった。

東京国立近代美術館の美術課長という要職にあった彼を多摩美が三顧の礼を尽くして多摩美にお迎えしたのは1998年のことである。爾来、本江さんは期待通り休講は一切しないという教育熱心な姿勢を定年まで貫かれ、また理事や評議員としてもリーダーシップを発揮された。私は彼と入れ替わるようにして一時、大阪の美術館長に転出したが、2015年に学長として復帰して以降は、大学院の研究科長である彼と文字通り二人三脚を組むようにして歩むことになったのである。

本江さんは美術史家としてはルドンなどの象徴主義についての優れた業績があり、美術評論家としては絵画論の先鋭な論客であり、また院生や卒業生など若い画家たちのコレクターでもあった。私個人にとっては、常に歯に衣着せぬ言い方でアドバイスをしてくれる“一つ年下の兄”のような存在であったといってもよい。他に掛け替えのいない方を失ったという思いから、未だに抜け出すことができないでいる。

## 室さん

名誉教授 堀浩哉

「室さん」こと室越健美さんとぼくは同い歳だった。1947年、戦争が終わって2年目、有史以来最もたくさんの子どもが生まれて「団塊の世代」と後に命名された戦後第一世代。急務の民主主義教育、その実験の矛盾と栄光と悲惨のすべてを背負わされた世代。だからぼくには信頼できる前例もなく、ぼくら自身が躓きながら道を切り開くしかなかった。

ぼくは学生運動などで寄り道をし、室さんは「7浪」という寄り道をし、その後もお互いにずいぶん離れた道の切り開き方をしながら、50代半ばで多摩美大の教員として初めて出会った。でも出会って間もなく、道程は全く異なってきたのに「同志」であると思えた。

それはぼくの勝手な思い込みで、室さんはひたすらがまんしてくれていただけなのかもしれないけれど、室さんとは(学生諸君を見つめながら)遠い希望や、遠い目標や、遠い喜びを共有している、と確信することができた。また一緒にシングルモルトのスコッチを飲みながら、話したかったのに。



**室越健美** 名誉教授  
1992年～ 講師(油画)  
1993年～ 同助教授  
1998年～ 同教授  
2017年～ 名誉教授  
2020年4月8日 逝去 72歳



**安齊重男** 客員教授

2004年～ 客員教授(油画)  
2015年 多摩美術大学アートテークにて個展  
「多摩美をめぐる人々」  
「もの派-70年代」  
2020年8月13日 逝去 81歳



**長澤英俊** 客員教授 ©ANZAI 1991  
2018年3月24日 ミラノにて逝去 77歳



**関根伸夫** 客員教授 ©ANZAI 1972  
2019年5月13日  
ロサンゼルスにて逝去 76歳

## その光の先へ

油画教授・美術学部長 小泉俊己

安齊さんの訃報を聞いた日、この事実をどう受け止めてよいか、あまりの突然なことに心の準備がまったく出来ていなかった。

ここ数年の内に、長澤英俊さん、関根伸夫さんと多摩美の大先輩であり、日本、いや世界の美術界にとっての巨星であるお二人が相次いで旅立たれてしまった。そして、その知らせを最も辛く受け止めていたのが安齊重男その人であった。

安齊さんの初めての渡欧の際、当地ミラノですでにアーティストとしての位置を固めつつあった長澤英俊さんとの出会い、そしてそこから始まった互いへのリスペクトと友情。ルチアーノ・ファプロラアルテ・ポーヴェラの作家たちを紹介し、安齊さんが世界への活動を広げる、その扉を開いたのも長澤さんである。その後、長澤さんはベネチア・ビエンナーレ、カッセル・ドクメンタなどへの参加によってその評価を不動のものとし、イタリアで最も尊敬される現代美術家の一人となった。

そしてもの派の代表的な作家である関根伸夫さん。1968年須磨離宮公園で発表した「位相一大地」は現代日本美術界で最も重要な作品であり、また出来事でもあった。その発表初期から安齊さんが写した記録は、完成した作品写真だけでなく、制作の過程や設置の現場にも及んだ。作家に寄り添うその撮影スタイルは、その後自らを現代美術の伴走者と呼ぶ所以でもある。安齊さんにとってその二人のアーティストとの関係は特別であったのだ。

安齊さんは2004年から本学の油画専攻の客員教授として多くの学生や卒業生と関わった。2009年学生とともに作り上げた現代美術の入門書とも言える『水曜日5限目』の冊子制作と展覧会の開催。2015年には本学の80周年事業として、またアートテークのお披露目の展覧会として「多摩美をめぐる人々」「もの派-70年代」。2015年から3年間、文化庁から助成を受けた埼玉県立近代美術館との共同研究「もの派資料」では写真提供とシンポジウムパネリスト、展覧会発表等、その他多くの企画や教育活動にご協力いただいた。それらの活動で得られた資料、データをもとに「安齊重男フォトアーカイヴ」として、安齊さんから直接ご指導いただきながら、その構築に向けて歩みだしたばかりであった。

若い人が好きだった。真剣に美術に向かうアーティストには年齢を問わずリスペクトし、伴走者として全力でサポートした。そして自らももっとも美術を愛し、信じていた。

安齊さんの半世紀以上にわたる全ての仕事、また交友について語るには紙幅が足りない。一枚のカットについて質問すれば、とめどなく出てくる安齊節をもっともっと聞いておきたかった。いや、聞いておくべきだった。そして我々アーティストにとって、安齊さんに作品を見てもらえないことが本当に辛い。何故ならばどんな批評家より、どんな学芸員より、どんな美術記者より、あるいはどんなアーティストより、最も現代美術を見ていた最高の目利きだったから。

本学キャンパスの正門には関根さんの〈空相〉が、東門を入ると長澤さんの〈TINDARI〉が私たちを迎えてくれる。そして多摩美術大学アートアーカイヴセンターの「安齊重男フォトアーカイヴ」は、現代日本美術研究の貴重な資料として、今後の研究に大きく寄与することを確信する。

それぞれはあまりに大きな星であった。しかしその光は消えることはない。遺された作品群、また記録や記憶の全てをもって、私たちに与えられたメルクマールとして燦然と輝き続けることだろう。そしてその輝きこそ、さらにその先を目指すことを私たちに託している光であるとも思えるのである。



関根伸夫「空相」をめぐる一つのプレゼンテーション ©ANZAI 2004



長澤英俊(TINDARI) ©ANZAI 2007



# トピックス

## 大学直営の学生寮「多摩美オリーブ館」が完成

八王子キャンパス隣接地に女子学生寮「多摩美オリーブ館(TAMABI OLIVE DORM)」が完成し、2021年4月から運営を開始します。本館は、地上5階建ての鉄筋コンクリート造で、2つの円弧が向かい合い、中庭には風が抜けるよう設計されています。1階にはダイニングやホールなどの共用スペースがあり、2階から5階には学生の居室・全186室を完備。勉強机・ベッド・ユニットバス・トイレ付きで、勉強机は作品を制作する時の作業台にもなるように作られています。また、各階にはランドリーとキッチンスタジオがそれぞれ備えられています。オリーブ館の命名は、オリーブが荒地などの厳しい環境下でも良く育つ、非常にたくましい木であることに由来します。学生たちにもたくましく強く、素晴らしい人材になってほしいとの願いを込めて付けられました。



外観



5階から中庭をのぞむ

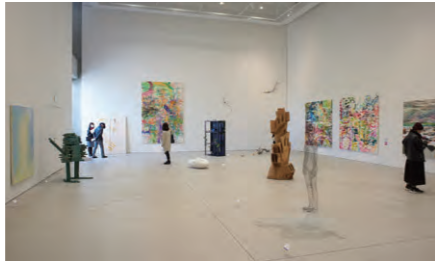


居室に設置された勉強机・ベッドは折りたたみ収納が可能。広いスペースを確保できる

## 美術学部卒業制作展・大学院修了制作展A日程を開催

1月14日～17日、八王子キャンパスで美術学部卒業制作展・大学院修了制作展A日程を開催しました。実施したのは、日本画、油画、版画、彫刻、工芸、環境デザイン、メディア芸術、情報デザインと、今年度新たにテキスタイルデザインを加え

た9学科・専攻・コースです。今年度も実施学科合同で選抜作品をアートテークに展示する「選抜展」を開催したほか、感染症対策をしながら公開講演会なども行いました。3月13日から始まるB日程では、6学科・専攻・コースが展示を行う予定です(本誌P.21参照)。



「選抜展」の展示風景

## 「多摩美の版画、50年」展を開催。オンラインイベントも多数実施

多摩美術大学美術館で1月6日～2月14日に、「多摩美の版画、50年」展を開催しました。本展は、本学における版画教育開始50周年を記念し、版画専攻が企画したものです。駒井哲郎、李禹煥、加山又造、和田誠など、本学にゆかりのある多彩な作家62名の版画作品を、「版画のコア」「版画と絵画」「版画と写真」「版画ともの派」「版画と現代美術」「版画とデザイン」という6つのテーマに分類し展示。会期中に多数行われたオンライントークイベントの様子は、美術館HPおよび本展特設サイトよりアーカイブ動画で視聴できます。



「多摩美の版画、50年」展の様子

## 「EWS」の特任教授も参加。アキバタマビ21 特別インタビュー

2020年に設立10周年を迎えたアキバタマビ21。コロナ禍の現在、アーティスト活動はいかにあり得るのか、これまでの振り返りとともに行った4組のアーティスト・インタビュー映像「出品作家に『今』を聞く/EWS教授に『世界』を聞く」を1月15日～2月14日に上映しました。エクスペリメンタルワークショップ(EWS)のアピチャップン・ウィーラセタクン教授と塩田千春教授には世界を舞台に生きることについてお話を伺っています。インタビュー内容はHPでも公開中です。

## 日立製作所とサービスデザインに関する産学共同研究を実施

情報デザインコースの3年次演習(担当教員:吉橋昭夫准教授)で、株式会社日立製作所と連携し、「信頼」を起点とするサービスデザインに関する産学共同研究を実施しました。学生たちは昨年9月から約5カ月をかけて『生活の中の身近にある信頼』を深掘りし、実証のプロセスを踏むことを徹底する中で新しい「信頼のかたち」を考案。それを基にした新しいサービスをデザインし、利用者の経験をかたちにすることに取り組みました。1月20日にオンラインで行われた成果報告会では、口コミを集めて街独自の観光地図を作りあげるサービスや家庭内のニュースを記録して共有する家族向けアプリ、初対面でも気軽に話ができる雰囲気作りを支援するソーシャルシールの開発など計11作品を発表。各作品について日立のデザイナーの皆さんから講評をいただきました。



河井あかりさんの作品:信頼されると期待に応えたいという実証実験の結果から家族向けのアプリを開発

## 多摩美×早稲田で、今年度も起業家育成の連携講座を実施

2017年から続く早稲田大学とプロダクトデザイン専攻との連携講座が今年度も開講されました。今回から受講対象に情報デザイン学科生も加わり、全10回の授業を行いました。本講座は「ビジネスアイデアの『表現力』を鍛えよう!」をテーマに、起業家育成を目的とした「ビジネスモデル仮説検証プログラム」を大学混成のグループワーク形式で展開するものです。今回は全てオンラインによる受講となりましたが、プロダクトデザイン・大橋由三子教授による「アイディエーション」の授業に、アートディレクターの上野隆文先生によるプレゼンテーションテクニックのレクチャーも加わるなど、カリキュラムも進化を続けています。受講生らは最終プレゼンを経て、2月17日、投資家らの前でプレゼンする「第3回WASEDA Demo Day」に参加しました。その結果、「わたたま賞」と「メンター賞」に、プロダクトデザイン3年・中島健さんのチームによる、画像を予約消去できる管理アプリ『CalPhoto!』が選ばれました。また、同専攻3年・伊藤百香さんが参加したチームは、家の中で香りの変化を付けることにより1日の気持ちの切り替えを助ける『Cycle Diffuser』を提案。「メンター賞」を受賞しました。

## 社会人講座「TCL」が「職業実践力育成プログラム(BP)」に認定

本学の社会人向け講座「TCL-多摩美術大学クリエイティブリーダーシッププログラム」が、2020年度文部科学省「職業実践力育成プログラム(BP)」の認定を受けました。TCLは「デザイン経営」を社会実装することを目的に、約2カ月間の履修証明プログラムとして2020年9月に開講しました。本認定制度は、大学等における社会人や企業等のニーズに応じた実践的・専門的なプログラムを「職業実践力育成プログラム(BP)」として文部科学大臣が認定するものです。2021年度は5月、9月、2022年1月から始まる3期間での開講を予定しています。

## 「DOMANI・明日展2021」に卒業生3名が選出

国立新美術館で1月30日～3月7日に開催された「DOMANI・明日展2021」に、07年大学院彫刻修了・利部志穂さん、10年大学院油画修了・高木大地さん、03年油画卒業・山本篤さんの計3名が選出されました。同展は海外で実践的に研修するための渡航費および滞在費を文化庁が支援する「新進芸術家海外研修制度」の成果発表展として行われています。この制度では採択結果が公開されている2010年度以降、のべ51名の本学出身者が採択されています。



高木大地『Wanderer』2020

## 『オリンピックデザイン全史』の推薦文を青柳正規理事長が担当

2020年12月1日に発売された『オリンピックデザイン全史1896～2020』(河出書房新社)。1896年第1回アテネ大会から続く近代オリンピック125年という全歴史のオリンピックデザインが集約された翻訳図鑑です。青柳正規理事長が推薦文を担当し、「誰もこれほどの規模でデザインのすばさを眺めたことはないはずだ」と、推薦の言葉を寄せています。

## プロダクトデザインの学生が今年度も展示と産学交流を行う「屋台トーク」開催

11月26日～28日、八王子キャンパスアートテークにて、プロダクトデザイン専攻第2スタジオ3年生が中心となって企画した「屋台トーク～デザインの、マルチステークホルダーダイアログ～」が開催されました。学生の作品展示を通して、企業で活躍する卒業生デザイナーらとオンラインで交流し、これからの「デザイン」の在り方について考えを深めました。

## 小田急電鉄×NTTドコモ「XRシティ™SHINJUKU」に協力

小田急電鉄株式会社と株式会社NTTドコモがすすめる新宿の新たな街づくり「XRシティ™SHINJUKU」のイベント「XR Collection & Museum」。2020年11月18日～23日、本イベントに彫刻学科と工芸学科が協力し、学生および大学院生の作品計5点を、小田急百貨店新宿店本館1階中央口前を会場に、スマホアプリで鑑賞できる新しい形のバーチャルアート展示として行いました。今回の協力は、小田急電鉄との連携協力協定に基づいたもので、学生にとってもコロナ禍における貴重な作品展示の場となりました。

## 「平出隆 最終講義=展 Air Language program」を開催

2020年12月10日～24日、芸術・平出隆教授の退職記念展として「平出隆 最終講義=展 Air Language program」が開催されました。会場である八王子キャンパスアートテークおよび図書館ラボラトリーには、「装幀、印刷、映像、音読の多次元」を展開。数学と詩学の接続を試行する詩人の、根源的書物論・芸術論が展覧会となりました。



「平出隆 最終講義=展 Air Language program」の様子

## 相澤陽介客員教授がヤマト運輸の新制服をデザイン

本学卒業生でテキスタイルデザイン・相澤陽介客員教授が、ヤマト運輸株式会社の新制服をデザインしました。2020年9月から着用が始まっている新制服は、コーポレートカラーの「グリーン」と、長年親しまれてきた「縦ストライプ」を前面に押し出したデザインです。生地には、植物由来PET素材を採用し、特殊な糸加工・生地設計で、伸縮性が13%向上。「動きやすさ」と「環境への配慮」を両立させ、配達ドライバーをはじめ、営業所の窓口担当など、約10万人に着用されています。



相澤陽介客員教授がデザインしたヤマト運輸の新制服

## 「ICAF2020」初のオンライン開催でタマガラアニメーションを上映

学生アニメーション映画祭「インター・カレッジ・アニメーション・フェスティバル(ICAF)」。18年目を迎えた2020年は「SWITCH ONLINE!」のキャッチコピーを掲げ、2020年9月19日～10月4日に初めてオンラインで開催されました。本学からは、グラフィックデザイン学科のアニメーション作品11作品が出品されました。会期中には、作品が特設WEBサイト上で公開されたほか、若手アニメーション作家らへのインタビューを共同配信するなど、オンラインならではの工夫が凝らされた映画祭となりました。

## 映像演出研究会がリモートで制作した映画に参加

本学の学生クラブ団体の映像演出研究会が、映画「突然失礼致します!」に参加しました。この映画は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により創作活動を制限された全国の大学生が、「コロナ世代、映画で闘う。」をコンセプトに、外出自粛期間中にリモートで制作した長編オムニバス映画です。全国約120大学、合計200人以上の学生が監督となり、「希望」をテーマに1分以内の映像作品を制作し、1つの作品としてまとめました。映像演出研究会からは3作品を出品しており、昨年10月までの2カ月間、YouTubeで本編が公開されました。

## 卒業制作展



## 美術学部卒業制作展・大学院修了制作展B日程

実施学科・専攻・コース=グラフィックデザイン、プロダクトデザイン、芸術、統合デザイン、演劇舞踊、劇場美術デザイン  
会期=3月13日[土]～15日[月]  
場所=八王子キャンパス

3月13日から始まるB日程では、上記6学科・専攻・コースが八王子キャンパスで展示を行います。ご来場時の諸注意など、詳しくはHPをご確認ください。



最優秀賞に選ばれたグラフィックデザイン4年・高橋美帆さんがデザインした卒業・修了制作展ポスター

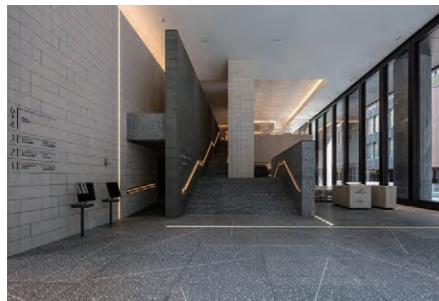
## 受賞

### 辻惟雄名誉教授が「第8回日本学賞」を受賞

本学元学長の辻惟雄名誉教授が、「第8回日本学賞」を受賞し、2020年11月23日に、東京・千代田区の学士会館で授賞式が行われました。一般社団法人日本学基金が主催する日本学賞は、日本文化の価値などを研究する「日本学」の各分野における、選考時点での最高の業績を顕彰するものです。対象となった業績は、「美術史における独自の視角」です。従来、特異で異端視されてきた画家、特に伊藤若冲その他の江戸期浮世絵の作家に対し、「異端をむしろ万物に対する熟視と捉えたことによって、より豊かな日本美術史を叙述した」と高く評価されました。

### アーティゾン美術館が「日本空間デザイン賞2020」金賞を受賞

環境デザイン・米谷ひろし教授が代表を務めるTONERICO:INC.が設計したアーティゾン美術館が、「日本空間デザイン賞2020」の博物館・文化空間部門において金賞を受賞しました。本アワードは、一般社団法人日本空間デザイン協会と一般社団法人日本商環境デザイン協会が主催する、日本最大級の空間デザインアワードです。アーティゾン美術館は、東京・京橋の地で愛されてきたプリチストン美術館が館名を変更し、2020年1月に新しい美術館として開館したものです。1階のエントランスでは、吹き抜けの空間に設けられた壁面によって動線が整理され、ミュージアムショップのある2階への期待感が高まるデザインになっています。



1階エントランス

### 海老塚耕一教授が「文部科学大臣表彰」を受賞

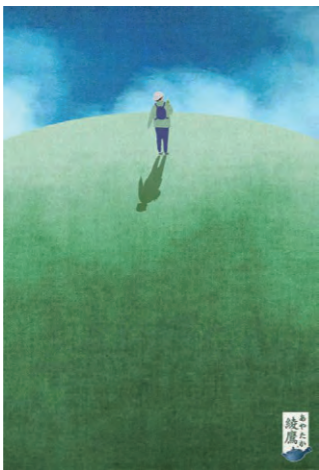
芸術・海老塚耕一教授が、2020年度「障害者の生涯学習支援活動」に係る「文部科学大臣表彰」を受賞しました。この表彰は、文部科学省が障がい者の生涯を通じた多様な学習を支える活動を行う個人または団体について、活動内容が他の模範と認められるものに対し、その功績をたたえるものです。障がいのある人にとって、「鑑賞する楽しさ」「創作、表現する楽しさや充実」を感じる機会の提供や、文化芸術活動を通じて自己表現への興味喚起、学びの意欲につながっていると評価され、今回の受賞となりました。

### プロダクトデザインの学生が東京理科大学や早稲田大学大学院生らと組んでハッカソンなどで受賞

プロダクトデザイン2年・高橋凜太郎さんは2020年11月、東京理科大学主催による「東京理科大学EDGE-NEXT事業 アフターコロナハッカソン・フェーズ2」に参加。「アフターコロナにおけるヘルスケアプロダクト」というテーマに、東京理科大学大学院生、同大学3年生、早稲田大学大学院生ら4名の合同チームで挑み、呼吸でメンタルヘルスを自己改善するアプリ『rebre』を開発。計8チームの中から「アイデア賞」を受賞しました。また、同年12月に行われた「KYOTO大学生グローバルベンチャーコンテスト2020 Online」にも、早稲田大学大学院生と2名で同アプリをブラッシュアップしてエントリーし、「二等賞・京都リサーチパーク賞」を受賞。高橋さんはアプリのUIやビジュアルデザインだけでなく、全編の英訳も担当したということです。

### 「Japan Six Sheet Award 2020」で卒業生が金・銀・銅賞を受賞

屋外広告のクリエイティブ賞「Japan Six Sheet Award 2020」で、13年グラフィックデザイン卒業・田中暢さん(株式会社アドブレン)が金賞を、15年グラフィックデザイン卒業・大石知足さん(株式会社エー・ティ・エー)が銀賞を、13年情報デザイン卒業・岡直哉さん(ヤフー株式会社)が銅賞を受賞しました。このアワードは、日本における屋外広告、とりわけシックスシートフォーマット(タテ1755mm×ヨコ1185mm)での表現技術の向上を目的として2012年にスタートし、2020年で9回目の開催となります。協賛各社から出題される課題を解決するクリエイティブアイデアに加え、都市の建築物や街並みと調和がとれた魅力的なデザインによって、都市景観に美しさをもたらすような優れた作品を評価するものです。受賞作品は2020年12月以降、東京都内および全国主要都市で実際に掲出されました。



田中暢(株式会社アドブレン)課題:綾鷹

### 油画的な学生が「シェル美術賞2020」で鷲田めるる審査員賞を受賞

次世代を担う若手作家のための公募展「シェル美術賞2020」にて、油画3年・堺大輝さんの作品『Self-Portrait』が鷲田めるる審査員賞を受賞しました。また、堺さんの受賞に加え本学学生、卒業生の計6名が入選しています。今回、昨年を超える846点の応募作品の中から選ばれた同作品は自画像をテーマにしており、2020年12月9日～21日に国立新美術館で開催された「シェル美術賞展2020」で展示されました。



堺大輝『Self-Portrait』

### 「ドローイングとは何か」展で卒業生が大賞・準大賞を受賞

第9回「ドローイングとは何か」展で、06年造形卒業・清野和正さんが大賞を、03年油画卒業・酒井崇さんが準大賞を受賞しました。本展は優れたドローイング作品を見出し、国際基準に見合ったドローイング展を開催することを目的とした公募展です。今年度は全国から153名、計258点の応募があり、第1次・第2次審査が行われた結果、入賞作品4点、入選作品34点が決定しました。1月20日～26日には、東京都美術館で入賞・入選作品展が行われました。



清野和正『かけがえのないもの3』

### 「CAF賞2020」「CAFAA賞2020」にてファイナリストに選出

公益財団法人現代芸術振興財団が主催する「CAF賞2020」にて大学院統合デザイン1年・板倉諄哉さんが所属するクリエイティブユニットOku Project(多摩美術大学大学院・東京藝術大学大学院)と、20年大学院情報デザイン修了・ヒラヤマナツホさんがファイナリストに選出されま

した。「CAF賞」は、学生の創作活動の支援と日本の現代芸術の振興を目的に開催し、日本全国の高校・大学・大学院・専門学校の学生、および日本国籍を有し海外の教育機関に在籍する学生の作品を対象としたアートアワードです。2020年12月2日～6日には、東京・代官山のヒルサイドフォーラムにて「CAF賞2020入選作品展覧会」が開催されました。また、同財団が主催する「CAFAA賞(CAF・アーティスト・アワード)2020」では、情報デザイン・AKI INOMATA非常勤講師がファイナリストに選出されています。

### 「VOCA展2021」に、卒業生と非常勤講師の計7名がノミネート

「VOCA展2021」において、05年油画卒業・榎倉冨香さん、12年大学院油画修了・加藤真史さん、04年彫刻卒業・盛圭太さん、科目等履修生1年(15年造形卒業)・吉國元さん、09年大学院博士後期満期退学・今井麗さん、13年油画卒業・武田竜真さん、版画/メディア芸術・永田康祐非常勤講師の計7名がノミネートされました。本展は、全国的美術館学芸員、ジャーナリスト、研究者などに40歳以下の若手作家の推薦を依頼し、その作家が平面作品の新作を出品するという方式により、全国各地から未知の優れた才能を紹介するものです。3月12日～30日には、上野の森美術館にて「VOCA展2021 現代美術の展望-新しい平面の作家たち」が開催されます。

### ELLE DECOR ITALIA「30 young talent」に修了生が選出

ELLE DECOR ITALIA30周年の記念として世界の若手デザイナーを30人紹介する特集ページ「30 young talent」に13年テキスタイルデザイン修了・氷室友里さんが選出されました。氷室さんは、本学在学中にフィンランドのアアルト大学に交換留学しジャカード織を修得。大学院での修了制作を土台に、オリジナルのテキスタイル開発へ発展させ注目を浴びました。現在は、オリジナルテキスタイルの開発のほか、企業へのデザイン提供や商業施設のアートワーク制作なども行い、テキスタイルデザイナーとして精力的に活動しています。

## 人事異動

### 新規採用

- **教務部入試課**  
坂本睦月 常勤嘱託 (2020年11月1日付)
- **学生部学生課**  
水谷明 常勤嘱託 (2020年12月1日付)
- **総合企画部広報課**  
加倉井美香 常勤嘱託
- **生涯学習センター事務部**

● **仲村乃里子** 常勤嘱託 (以上、2021年1月1日付)

### 退職

- **グラフィックデザイン**  
橋村実里 助手 (2020年11月17日付)

## 研究活動

### 2020年度 科学研究費助成事業 採択者

「科学研究費助成事業(科研費)」は、人文・社会科学から自然科学まで全ての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる学術研究を格段に発展させることを目的とする競争的資金で、独創的・先駆的な研究をする個人の研究者に対する助成です。また、「ひらめき☆ときめきサイエンス」は、科研費の研究成果について小・中・高校生に発信し、直に見る、聞く、ふれることで、科学の面白さを感じてもらおうプログラムです。

- **基盤研究(B)(一般)**
  - 植村朋弘教授(情報デザイン)  
幼児のアートの思考を伴うプロジェクト活動における学びの変容を可視化する実証的研究
- **基盤研究(C)(一般)**
  - 鶴岡真弓名誉教授  
エルミターージュ美術館所蔵「黄金の鹿」の神話と造形表象―「生命再生の鹿角」の研究
  - 佐賀一郎准教授(グラフィックデザイン)  
美術―デザイン史概念を共有・育成するデザインアーカイブ群の構築
  - 森脇裕之教授(情報デザイン)  
メディアアート作品の修復・復元作業から見た作品分析方法の研究
  - 大島徹也准教授(芸術)  
もう一つの抽象表現主義史―抽象表現主義者たちの自主的集団活動についての考察
  - 菅俊一講師(統合デザイン)  
手がかりの提示による空間における身体誘導のための新しいメディア表現方法論の研究
- **木下京子教授**(共通教育)  
近世杉戸絵に関わる総合的研究
- **中村寛准教授**(共通教育)  
アメリカ社会の暴力と反暴力・脱暴力の試みに関する人類学的研究
- **若手研究**
  - 後藤正矢講師(共通教育)  
大学における幼稚園教員養成の歴史的研究
  - 中嶋英樹講師(共通教育)  
1880年代から1920年代の英国小説における「散漫な注意」の技法
  - 堤涼子助教(大学院)  
住まいの屋外空間における生活者によるデザインの実態とプロセスの研究
  - 陳瓦宇助教(大学院)  
近代日本画における画紙の特質による技法の展開

- **研究成果公開促進費**  
【研究成果公開発表(B)(ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI)】
- 深津裕子教授(共通教育)  
テキスタイル×SDGs入門:植物を編んでエコロジカルな生活デザイン
- 高梨美穂准教授(共通教育)  
成長することば(昔の自分・今の自分)―ことばを学んで自己紹介絵本を作ってみよう!

### 2020年度 科学研究費以外の公的な助成事業 採択者

- **【独立行政法人日本学術振興会】二国間交流事業 共同研究・セミナー**
- 木下京子教授(共通教育)  
アーサー・トレス・コレクションの研究と目録化
- **【文化庁】文化芸術振興費補助金(メディア芸術アーカイブ推進支援事業)**
- 森脇裕之教授(情報デザイン)  
山口勝弘ビデオ彫刻アーカイブ事業
- **【日本私立学校振興・共済事業団】学術研究振興資金**
- 深津裕子教授(共通教育)  
日本とアジアの群島を結ぶ文様研究(副題:先端メディアによるデザインアーカイブ構築)
- **【独立行政法人科学技術振興機構】戦略的創造研究推進事業(CREST)**  
領域:(ナノエレクトロニクス) 素材・デバイス・システム融合による革新的ナノエレクトロニクスの創成
- 濱田芳治教授(プロダクトデザイン)  
超高速・超低電力・超大面積エレクトロミズム「エレクトロクロミックデバイスの美術応用」
- **【経済産業省】省エネルギー等に関する国際標準の獲得・普及事業委託費**
- 楠房子教授(情報デザイン)  
超省エネ反射型壁面表示タイルユニット(電子タイル)に関する国際標準化

## 訃報

※2021年1月29日時点の情報です

**高木晃 名誉教授**  
2020年8月20日 86歳  
1970年～ 助教授(デザイン科立体)  
1977年～ 同教授  
1998年～ 教授(生産デザイン学科プロダクトデザイン専攻)  
2004年～ 名誉教授

**福島誠 名誉教授**  
2020年12月12日 88歳  
1970年～ 講師(絵画学科油画専攻)  
1971年～ 同助教授  
1988年～ 同教授  
2003年～ 名誉教授

謹んでお悔やみ申し上げ、ご冥福をお祈り致します。

# 現代日本画の系譜—タマビDNA展

# アートテーク



第一会場：多摩美術大学美術館 **入館無料**

4月3日[土]～6月20日[日]

火曜休館 ※5月4日(火・祝)は開館、5月6日(木)休館  
10:00～17:00(最終入館16:30まで)

第二会場：多摩美術大学アートテークギャラリー **入場無料**

4月3日[土]～5月7日[金]

日曜休館 ※5月3日(月・祝)、5月4日(火・祝)休館 10:00～17:00(最終日のみ15:00まで)

1963年に加山又造が、その2年後に横山操が本学に着任し、この個性あふれる魅力的な二人が手を携えて教鞭を執ることにより、日本画の因習や伝統に囚われない自由な発想による日本画教育が行われ、多くの作家たちを輩出しました。以降、加山・横山の精神は継承され、本学では日本画を出自とした様々な表現を尊重し、多彩な作家を育成してまいりました。本展では、加山又造と横山操を「現代日本画」の旗手と捉え、本学日本画教育の中興の祖と位置づけました。そして加山と横山から薫陶を受けた教え子たちが二人の理念をどのように次世代に伝え、今現在まで受け継いでいるのかを、87名の作家たちの作品を展観することで検証します。

## アキバタマビ21



タマビが運営する新しい創造の場 3331 Arts Chiyoda内にあるアキバタマビ21は、若いアーティストたちが展覧会を行うスペースです。卒業後のキャリア形成支援を目的としており、企画から広報物・アーカイブ作成まで自ら手掛ける企画展を、年間約8回開催しています。千代田区外神田6-11-14 3331 Arts Chiyoda 201・202 | 12:00～19:00(金・土は20:00まで) | 火曜休場 | 入場無料



2月24日[水]～3月29日[月]

第87回展  
「ここではないどこか」

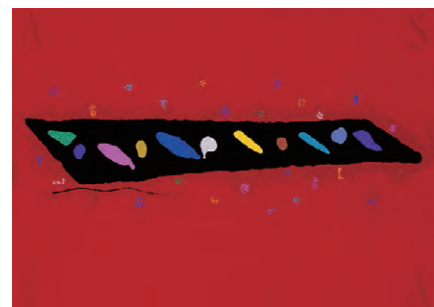
独特の世界観を構築するアニメーション作家5名による展覧会。ひとつのキーワードをもとに生み出された作品世界への旅に、観るものを連れ出す。出品作家＝池田真友、キヤ、しばたかひる、りよこ、若林萌

八王子キャンパスの中心に位置する、知と創造の多面的複合施設 アートテーク(Art-Theque)は2015年、旧図書館跡地に建設された施設です。ギャラリー、自由デッサン室(石膏室)、大学院博士後期課程アトリエ、アートアーカイヴセンター、収蔵庫などで構成されています。八王子キャンパス内 | ギャラリー開場時間 10:00～17:00(展覧会による) | 日曜・授業日以外の祝日休館 | 入場無料  
以下は、ギャラリーで開催予定の展覧会です。

6月3日[木]～12日[土]

木下勝弘  
退職記念展

グラフィックデザイン・  
木下勝弘教授の  
退職記念展



木下勝弘 ポスター『ASIA』

## 展覧会

2月3日[水]～5月10日[月] 国立新美術館

グラフィックデザイン | 佐藤可士和 客員教授  
佐藤可士和展

## 新刊



あらゆるところに同時にいる  
アフォーダンスの幾何学  
佐々木正人 著(総合デザイン|客員教授)  
学芸みらい社 | 2020年3月24日刊 |  
2,500円+税



自伝/アビオーンへの反論  
秦剛平 訳(名誉教授)  
青土社 | 2020年5月26日刊 |  
4,600円+税



マイブック—2021年の記録—  
大貫卓也 企画・デザイン  
(グラフィックデザイン|教授)  
新潮社 | 2020年10月1日刊 |  
400円+税



川端実一 満ちゆく絵画  
大島敬也 共著(芸術|准教授)  
大塚美術 | 2020年10月19日刊 |  
5,000円+税



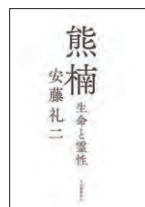
デザインング・プログラム  
永原康史 監訳(情報デザイン|教授)  
ビー・エヌ・エヌ新社 |  
2020年10月20日刊 |  
3,500円+税



美術の経済  
「名画」を生み出すお金の話  
小川敦生 著(芸術|教授)  
インプレス | 2020年10月22日刊 |  
1,680円+税



ジョナス・メカス論集  
映像詩人の全貌  
吉田悠樹彦 共編著(共通教育|非常勤講師)  
金子遊 共編著(芸術|准教授)  
neoneo 編集室 | 2020年11月5日刊 |  
2,000円+税



熊楠 生命と靈性  
安藤礼二 著(芸術|教授)  
河出書房新社 |  
2020年12月29日刊 |  
2,400円+税



近藤先生の面白授業  
日中比較美術史  
近藤秀實 著(名誉教授)  
合同フォレスト | 2月10日刊 |  
2,500円+税

本学の新型コロナウイルス感染症対策に準じて、開場時間や内容が変更となることがございます。HPで事前に確認してからご来場ください。

「TAMABI NEWS」では受賞や活動報告を募集しています。総合企画部(TEL:03-3702-1168 / e-mail:news@tamabi.ac.jp)までお知らせください。

